

都道府県・ 指定都市番号	4 3	都道府県・ 指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	2 (2) 義務教育学校				
				領域名	へき地教育				
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (2) へき地の学校における教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究 ③少人数学級等、児童生徒の学級集団の状況等を踏まえた課題の改善 ④へき地の学校ならではの教育資源を生かした特色ある教育活動の展開のための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善								
ふりがな 学校名		うぶやまそんりつ うぶやまがくえん 産山村立 産山学園							
学年等	1	2	3	4	5	6	特別支援	計	学校・地域の特色及び実態等 ○地域の課題として少子高齢化があり、本村教育への村民の期待や本校への尽力は大きい。 ○純朴で、思いやりのある児童・生徒であるが、大人が先回りして手を差し出してしまい、主体性や積極性に欠ける場面が見られる。また、自分の考えを書く力、自分の考えを伝える力の伸びが強く望まれる。
児童数	9	13	8	15	8	13	4	70	
単式・複式	単	単	単	単	単	単	複		
学年等	7	8	9				特別支援	計	
生徒数	15	10	13				1	39	
単式・複式	単	単	単				単		
R2.5.1現在 へき地学校の級 (1), 教員数 (2 2)									
所在地 (電話番号)		熊本県阿蘇郡産山村大字山鹿 476 番地 (0967-25-2012)							
研究内容等掲載ウェブサイト URL		https://jh.higo.ed.jp/ubuyamajh/							
研究のキーワード		単元・授業のゴールの姿の明確化と単元・授業のふりかえり ユニバーサルデザイン 学び合いの工夫 ICTの効果的な活用 地域社会・教育委員会との連携							
研究結果のポイント		○単元や授業のゴール (目指す姿) を明確にしたことで、学習に見通しを持ち、粘り強く課題に取り組む児童生徒の姿が見られるようになった。 ○ねらいを達成するための学習過程において、各授業者による思考ツールやICTの活用等の創意工夫が見られ、児童生徒の「教え合い」が「協働的な学び」へと高まった。 ○「ふりかえり」の中で、児童生徒が自分の伸びを感じ、「さらにこんな学習をしたい」という意欲を持った。ゴールを見据えて授業を構想する教員が増えてきた。 ○「わかる・できる」協働的な授業づくりの実践を、各教科・領域全てにおいて更に深めることができた。 ○「子供一人一人の姿をよく見取る」「特別の教育課程を更なる強みへと高める」「地域人材を活用する」ことで、へき地ならではの質の高い教育が展開できることが分かった。							

1 研究主題等

(1) 研究主題

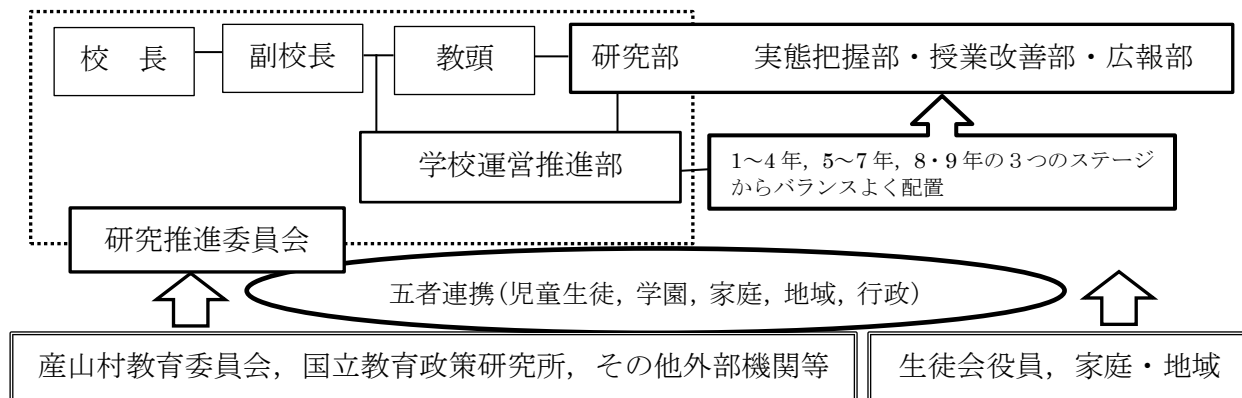
「わかる・できる」協働的な授業の創造

(2) 研究主題設定の理由

- ① 新学習指導要領では、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。協働的な学びによって子供同士が学び合うことこそが、一人残らず子供の学びを実現する方法だと考え、本主題を設定した。
- ② 本村では、「We have a dream (私たちには 夢がある)」という校訓の下、「産山で教育を受けてよかった」と実感できる教育を目指し、小中一貫教育を進め、特別の教育課程を編成し、特色ある教育に取り組んできた。これまでの本村教育の歩みを振り返り、日々の授業という足下を見つめた実践が求められていると考え、本主題を設定した。

- ③ へき地の学校という特性から、一人一人の子供を、教職員をはじめとした多くの大人が見守ることができる。また、1人1台のタブレット端末の整備等、教育環境にも恵まれている。その反面、自ら学ぼうとする主体性に欠ける面があり、学習を苦手としている学園生も多い。以上のことから、本主題に取り組むことは必要不可欠であると考えた。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

令和元年度	- 理論の構築（4～6月） - 研究組織，計画，体制づくり - 大学教授招聘研修（授業UD研修） - 実践（7～1月） - 研究授業及び授業研究会（全職員参加の研究授業3回，自主研究授業9回） - 児童生徒，家庭，教職員対象の三者アンケート（7月，12月に実施） - 小中一貫教育全国サミット参加，先進校視察 - 学力調査官訪問 - まとめ・次年度に向けて（2～3月） - 講師招聘授業，大学教授招聘研修（授業UD研修） - 成果報告書（リーフレット）作成・配付
令和2年度	- 理論の再構築（4～7月） - 研究組織，計画，体制づくり - 大学教授招聘研修 7/8（研究主題に迫る授業づくり） - 実践（8～12月） - 調査官とのオンライン授業研究会（全職員参加） - 調査官によるオンライン研修（研究主題の実現に向けた演習） - 令和2年度産山村立産山学園研究発表会（12月4日，オンライン開催） - 大学教授招聘・研究協力 12/4 - まとめ・次年度に向けて（2～3月） - 研究協議会【分科会：へき地教育】での研究発表（オンライン開催） - 大学教授招聘研修 2/3（研究の継続） - 研究成果報告書作成・配付

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ① 少人数学級等，児童生徒の学級集団の状況等を踏まえた課題の改善
全授業において共通実践として取り組んでいる学習過程「産山型学習」において，「子供主体の授業にするには？」，「子供が『わかった』『できた』と達成感を感じる授業にするには？」という視点を持ち，授業改善を図る。
- ② へき地の学校ならではの教育資源を生かした特色ある教育活動の展開のための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善
各教科等を貫いて横断的に育成したい資質・能力としての「主体性」「創造性」について，子

供や家庭、地域との共有化を図り、各教科に加え、特別の教育課程（うぶやま学・チャレンジ学習・英会話）や特別活動等においても、それぞれの特質に応じた取組を積極的に行い、効果的なカリキュラム・マネジメントを確立する。

※特別の教育課程について

本校の校種は義務教育学校であり、9年間の系統性・体系性に配慮するなどの要件を満たした上で、小中一貫教科等の設定や指導内容の入れ替え・移行などの教育課程の特例が認められている。以下、3つの特別の教育課程について簡潔に説明する。

【うぶやま学】総合的な学習の時間を基盤としたキャリア・地域体験重視の学習（1～9年）

【英会話】30年以上続くタイ国姉妹校との交流を更に深めるため、グローバル化に対応したコミュニケーション能力を育成する学習

【チャレンジ学習】自ら目標を決め、自分のペースで努力し、漢字検定・算数検定・数学検定等に挑戦する学習（検定費は全額村が支援）

（2）具体的な研究活動

① 少人数学級等、児童生徒の学級集団の状況等を踏まえた課題の改善

＜令和元年度：ユニバーサルデザイン（UD）化の視点を意識した授業改善＞

授業のUDを、「全ての子供が楽しく学び合い、『わかる・できる』を目指す授業デザイン」と捉え、主に以下の研究活動に取り組んだ。

- ・児童生徒のつまずきを想定した「参加」「理解」「習得・活用」の階層的な指導の展開
- ・UDの3本柱である「視覚化」「焦点化」「共有化」に基づいた様々な指導・支援の工夫

＜令和2年度：単元・授業のゴールを明確にし、学び合い、高め合う授業の創造＞

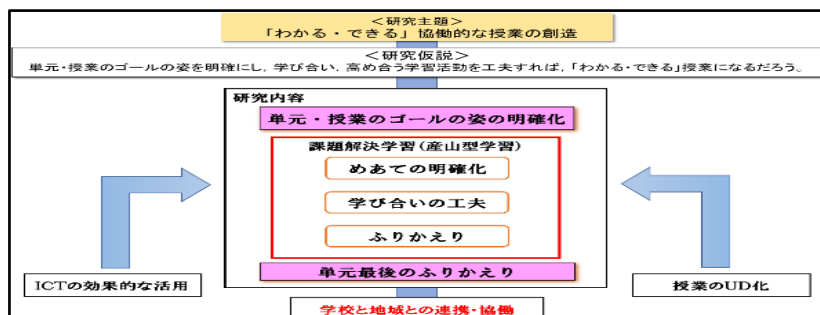
「単元・授業のゴールの姿を明確にし、学び合い、高め合う学習活動を工夫すれば、『わかる・できる』授業になるだろう」を研究仮説として設定し、主に以下の研究活動に取り組んだ。

- ・一単位時間の学習過程「産山型学習」において、児童生徒の視点から子供のつぶやきを、教師の視点から指導・支援の在り方などを洗い出した。【図1参照】洗い出しを基に、9年間を通して「確かな学力」を育む学習過程を改めて確立し、授業改善のポイントとして全職員で共有した。

産山型学習		
過程	児童生徒の視点から	授業者の視点から
う～ん 今日の課題は？	◎学習課題（めあて）をつかむ。 ・学習課題（めあて）を確かめて、やる気を出し、学習の見通しを立てる。 「なぜ」「おそらく」（疑問や予想）	◎めあての明確化 ・授業のゴールの姿の明確化 ・導入の工夫
ぶっ かっ てっ みょう ひど り！	◎ひとり学び（個人思考）で課題解決に取り組み、自分の考えを持つ。 ・学習課題についてしっかりと考え、それを書くなどして自分の考えを持つ。 「やってみよう」（挑戦）	◎ひとり学びの工夫 ・自分の考えに対し、根拠を明確にさせる。 ・思考ツールの活用 ・ICTの効果的な活用 ・発問の工夫
やろ う みん な で！	◎学び合って、学習課題（めあて）を解決する。 ・友達と話し合い、さらに考え、学習を深める。 ・先生の話をしっかり聞き、問題を解いたり深まった考えを書いたりしてまとめ、学習課題を解決する。 「なるほど」「さっど」（納得感）	◎学び合いの工夫 ・ペア、グループ、全体などの学習形態の工夫 ・視点をもたせた話し合い ・発表のルール（根拠）や学習リーダーの設定 ・ICTの効果的な活用
ま と め ふ り か え ろ う！	◎学習を振り返り、つなげる。 ・自分や友達のがんばりを振り返り、そのよさを認め、次時につなげる。 ・学習したことを振り返る。 「わかった」「できた」「もっとやってみよう」（実感や達成感、更なる意欲）	◎ふりかえり ・ふりかえりの視点を持たせる。 ・ふりかえりシートの活用 ・次の学習への意欲を持たせる評価の工夫

【図1：令和2年度に共有した学習過程「産山型学習」】

- ・単元のゴールの姿を設定し、単元などの内容や時間のまとまりを見通して、授業を構想した。（①ゴールの明確化→②ゴールに迫る単元を通した学習課題を設定→③ゴールの姿を実現するための学習活動を明確化）【図2参照】



【図2：研究構想図】

- ・「ふりかえり」では、「あ・か・う・し・どん（「あ～なるほど」と思ったこと、考えさせられた仲間の意見、「う～ん」と疑問に思ったこと、調べてみたい・もっと知りたいこと、どんなことに学びを生かしたいか）」などの自らの学びを振り返る視点を持たせた。授業終末の「ふりかえり」では「わかった・できた」という達成感を味わえるようにし、単元終末の「ふりかえり」では「〇〇な力が身に付いたので、◇◇な場面で〇〇な力を生かしたい」という未

来志向の振り返りができるよう工夫した。

- ② へき地の学校ならではの教育資源を生かした特色ある教育活動の展開のための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善

- ・特別の教育課程である「うぶやま学」等においても、図1・2で示した学習過程及び単元のゴールの姿の明確化等の共通実践を進めた。

事例) 4年生うぶやま学 単元名「うぶやま茶プロジェクト」

単元のゴールの姿を「うぶやま茶を通して、自分のやりたいことに気付き、そのためにやらなければならないことについて自ら学び考え、考えたことを表現することによって、その考えを広め、やりたいことを実現しようとする姿」と設定し、授業後・単元終了後に視点を持たせ、「ふりかえり」を行った。また、多くの地域人材を活用した。

- ・各教科・領域において、授業構想を行う際に、地域資源とつなげる視点を持つよう方向付けるため、全職員が参加する研究授業でモデルを示した。

事例) 8年生社会科 単元名「九州地方～環境問題と環境保全を中心に考えよう～」

単元のゴールの姿を「身近な阿蘇の草原が失われつつあるという社会的問題について関心を持ち、その背景について諸資料を活用しながら分析及び説明し、その成果を基に、草原保全の在り方について自己の意見を形成・表現している姿」と設定した。

- ・村教育委員会指導主事には、週に一度の研究推進委員会に参加していただいた。また、教育委員会が行った教職員対象の研究アンケート(10月実施)結果を踏まえ、持続可能な五者連携の教育研究が展開されているかという視点で、全職員に対し指導助言をいただいた。

3 研究の成果と課題(○成果●課題)

- 単元や授業のゴール(目指す姿)を教師と児童生徒が共有し明確にしたことで、学習に見通しを持つことができ、粘り強く課題に取り組む児童生徒の姿が見られるようになった。それにより、ゴールを見据えて授業を構想する教員が増えた。
- 学習過程「産山型学習」【図1】のひとり学びの場面では、「思考ツール等を活用し一人一人の児童生徒の状況(思考やつまづき)を丁寧に把握する」、学び合いの場面では、「話し合いの視点を与え、児童生徒の思考を広げ深める」などの授業者の関わりが多く見られるようになった。
- 「ふりかえり」を通して、児童生徒が自分の伸びを感じ、「さらにこんな学習をしたい」という意欲を持つことができている。『もみじの神秘』など単元課題に挑戦した授業が印象に残っている」のように達成感を味わっている感想が、単元終了後に多く見られるようになった。
- 教育委員会のアンケート結果を基に全教職員でそれぞれの思いを共有したことで、全教職員が協働して研究に取り組むことができた。
- 2年間継続して取り組んだことで、「わかる・できる」協働的な授業づくりの実践を、各教科・領域全てにおいて更に深めることができた。
- 「子供一人一人の姿をよく見取る」、「特別の教育課程を更なる強みへと高める」、「地域人材を活用する」ことで、へき地ならではの質の高い教育が展開できることが分かった。
- 学び合いの工夫においては、コロナ禍により、グループなどの小集団活動を積極的に行うことはできなかったが、授業者ごとに、「協働的な学び」へと高めるために、発問を工夫したり、思考ツールやICTを活用したりするなどの創意工夫が見られた。
- コロナ禍により、家庭や地域社会と連携する行事の規模を縮小するケースもあったが、ICTを活用してオンラインで地域社会とつながるよう努めた。

4 今後の取組

「産山で教育を受けてよかったと実感できる教育の創造」を目指し、以下の4点に力点を置く。

- ・五者連携による、へき地の強みを生かした研究の歩みを止めない。
- ・児童生徒の代表と教職員が熟議し、協働する場を設定する。
- ・児童生徒が主体的に計画を立案・実践する家庭学習を推進する。
- ・子供一人一人の姿をさらに深く見取る職員集団、授業実践などの日常的な情報交換を積極的に行う職員集団を目指す。